鳥居にみる天草下浦石工の活動

Working of AMAKUSA SHIMOURA Mason
—Case of Shrine Gate—

時　松　雅　史

要　　約

熊本県天草市の下浦石工は幕末から地元の天草地域はいうまでもなく、有明海沿岸や八代海沿岸域において砂岩製の石造物を数多く製作している。本稿は天草下浦石工が製作した神社の鳥居の分布状況を調査することで、下浦石工の活動範囲について明らかにしようとするものである。調査結果から、北は熊本県荒尾市や玉名市岱明町の有明海沿岸域、南は宇城市から水俣市までの八代海沿岸域、さらには鹿児島県長島町まで及んでいることがわかった。

1. はじめに

天草上島・下島を含む八代海沿岸部の神社には天草下浦地区で産する砂岩を使って製作された鳥居・手水鉢・狛犬・石灯籠が多数見られる。砂岩製の石造物は凝灰岩や安山岩のそれとは違って、風雨による傷みが早く剥離が進んでいるものが多い。そこで平成 16 年（2004）から、筆者の所属する熊本高等専門学校八代キャンパス（旧八代工業高等専門学校）では、創立 30 周年記念事業の一環としてこの天草下浦石工の作品について調査を行った。平成 20 年（2008）に『天草石工の活動を通じた環不知火海の歴史と文化』と題して報告書を提出、これにより天草下浦石工が江戸時代から昭和初期にかけて八代海沿岸域で活発に生産活動を行っていたことを明らかにした。本稿では、この報告書に掲載しているデータに平成 21 ～ 28 年の調査データを加え、さらに調査範囲を八代海から有明海沿岸域まで広げることで、天草下浦石工の活動範囲がどれくらいに及んでいるのか、神社にある砂岩製の鳥居を通じて明らかにする。鳥居を調査対象とした理由は、他の石造物に比べて石工の出身地名と名前が作品中に刻まれていることが多いからである（写真 1）。

写真１　玉名市岱明町天満宮銘文（2012）

2. 天草下浦石工とは

下浦石工は宝暦 10 年（1760）ごろ、肥前白石（佐賀県杵島郡）の藩士松室五郎左衛門が移り住んだことに始まると言われている[1)]。近年は新聞でも紹介され、下浦石工の存在が広く知られるようになった。下浦は天草市（旧本渡市）上島の南西部に位置し、八代海に面する。この地で石材となる砂岩が採掘されたことで石材産業が発展した。天保 3 年（1832）には本渡市街地にある石造りの祇園橋が下浦の辰右衛門により架けられた。また幕末から明治期にかけては天草郡御領村大島郷出身の小山秀が長崎の大浦天主堂・オランダ坂・外国人向けの洋風建築物の普請工事を担当したことで知られているが工事の際、地元である天草から大工及び石工を呼んで作業に当たり、石材も天草産の石材（砂岩）を使用したことも知られている[2)]。こうしたことから天草で多くの名前をとどめている下浦の石工たちがこれらの工事に関わっていると考えられる。昭和 16 年（1941）の記録では熊本県内における石材店（天草以外）の下浦出身

1)　これより 60 ～ 70 年ほど古い江戸時代中期の元禄年間という説もある。

2)　オランダ坂の石材については、『長崎石物語』（長崎文献社）の著者布施厚氏によるとこの石は「諫早石」であると説明している。一方、北野典夫氏は『海鳴りの果てに　―天草海外発展史―』（みくに社）の中で「長崎人請負による大浦街路やオランダ坂の石畳舗装工事には、天草の石工が動員され、厖大な量にのぼる天草砥石の角材が用いられたと伝えられている」と述べている。今後、天草産の石と諫早の石が使用されている区域を改めて検証する必要がある。

者は 40 軒、長崎県が 17 軒、佐賀県が 1 軒、福岡県が 8 軒、鹿児島県が 20 軒となっている[3)]。このように天草下浦から九州各地へ進出するものも多数いた。事実、天草市下浦の国道 266 号線沿いにある「下浦石工発祥の地」と銘打った記念碑（平成 8 年 12 月）には他県からの寄付者の名前が多く見られる。

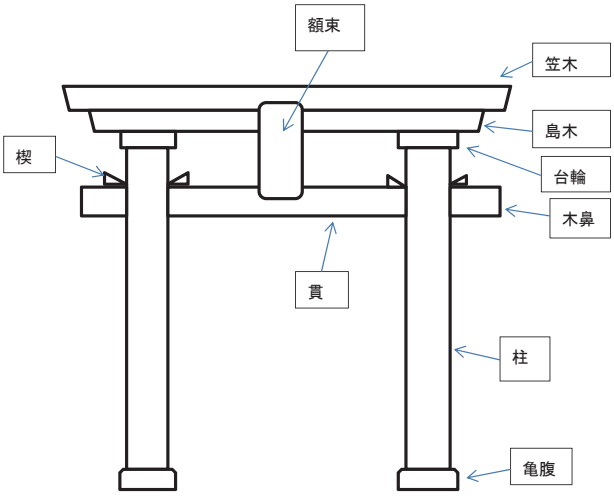
写真 2　八代市遥拝神社鳥居（2014）

写真 3　八代市敷川内神社鳥居（2007）

3. 下浦石工による鳥居の特徴

下浦石工が製作した鳥居は、写真 2・3 のようにまず鳥居の屋根ともいうべき笠木の両端が反り上り、島木の下側部分には台輪が設けられている。次に額束を支える貫と鳥居の柱の接合部分にある楔が設けられていない。最後に長い 2 本の柱を内向きに傾かせずに垂直に立たせているという特徴がある（鳥居の各部品の名称は図 1 を参照）。こうした鳥居の製作を行う技術

図 1　鳥居の各部名称



3)　本渡市立歴史民俗資料館「くらしに息づく下浦石工展」（1999）の資料による。

は、これまでの調査結果から肥前（佐賀県）の石工により伝えられたものではないかと考えている。その理由として、まず下浦石工の元祖である松室五郎左衛門が肥前出身であること、次に八代市坂本町にある古田阿蘇神社の鳥居は元禄９年（1696）のもので、石工の名前があり、「肥前住　村山兵太夫」と刻まれていること、また上天草市大矢野町登立の天満宮（宝永２〈1705〉年）の鳥居にも石工名があり、「肥前国砥川村住　池田清五ヱ門　池田新左郎　山本彦兵衛」と刻まれていることが挙げられる。それでは肥前の古い鳥居の意匠が八代海沿岸域で見られるものと同じかといえばそうではなく異なる点もある。肥前の古い鳥居は笠木と島木が一体となって船の先のように反っており、柱が太く三個の石で組み合わされているのが特徴で、一般に肥前鳥居と呼ばれている。この肥前鳥居と八代海沿岸域の古い鳥居の共通点としては、笠木・島木及び貫が３個の石で接合されていること、また柱については、八代海沿岸の古い鳥居は柱を２個の石で接合されているものが多いことから、１本の長い石を使わずに複数の石で組み合わせていることが挙げられる。同じ熊本県南部に位置する人吉・球磨地域では、鳥居の意匠が若干異なり、島木が笠木に対して極端に薄く造られていて、社名を記す額束も横向きに設置されているのが特徴である（写真４）。

写真４　人吉市岩屋熊野座神社鳥居（2014）

4. 砂岩製鳥居の分布について

筆者が実際に神社に出向いて確認した砂岩製の鳥居を表１に示した。以下、地域別に鳥居や石工等について述べる。

表１　砂岩製の鳥居一覧

市町村名	町・字名	神社名	建設年	石工名	備考
佐賀県鳥栖市	村田町	村田八幡神社 一の鳥居	慶安 2年(1649)	不明	天草産の石と 伝えられている
荒尾市	上小路	上荒尾熊野座神社	明治16年(1883) 6月	吉田寶太郎	天草下浦石工
玉名市岱明町	野口字木 船	貴船神 社	明治11年(1878) 3月	船場住太郎	天草下浦石工
	中	天満 宮	明治41年(1908) 5月	船場住廣	天草下浦石工
熊本市	西区上代	高橋稲荷神社	昭和13年(1938) 5月	黒川若松	天草下浦石工
宇城市三角町	郡浦	郡浦神社	天明 5年(1785) 8月	不明	
宇城市松橋町	松橋	松橋熊野宮	昭和14年(1939)	不明	
宇城市不知火町	大見	大見神社	明治31年(1898)10月	不明	
	松合	天満宮	不明	不明	
	永尾	永尾神 社	明治12年(1879)	吉田口吉	天草下浦石工
	園田	天満宮	不明	不明	額束のみ遺される
	高良	幸崎宮	不明	不明	修復あり
	高良	高良八幡宮	天保 3年(1833) 2月	新出村榮助 下浦口手代 六右衛門	解体され石垣とし て利用される
氷川町	鹿野	竜神宮	安政 6年(1859)	虎五郎	天草下浦石工 解体 柱のみ
八代市鏡町	有佐	松尾神社	不明	不明	修復あり
	貝洲	貝洲加藤神社	明治元年(1868) 頃	不明	解体
	内田	八大竜宮社	文政 2年(1814)	不明	
八代市	妙見町	八代神社(妙見宮)	宝暦年間(1751～1764)	不明	解体
	妙見町	霊符神社三の鳥居	江戸時代後期 ヵ	不明	笠木・島木が 3本継ぎ
	古閑中町	若宮神社	昭和19年(1944)10月	石翠堂刻	
	本町一丁目	春日神社	明治12年(1879)12月	不明	解体
	本町四丁目	住吉神社	昭和29年(1954) 4月	黒川若松	天草下浦石工
	植柳元町	植柳神社	大正14年(1925) 7月	森口清一	天草下浦石工
	豊原上町	遥拝神社	明治21年(1888) 1月	三山ニ蔵	同上　解体
	豊原下町	櫛田神社	明治19年(1886) 1月	不明	
	奈良木町	奈良木神社	明治20年(1887) 2月	三山ニ 蔵	天草下浦石工
	葭牟田町	彌次神社	明治26年(1893) 9月 新額束裏に記載	菅原口太郎	天草下浦石工 解体
	鼠蔵 町	弥継神 社	明治19年(1886) 1月	菅原甚太郎	天草下浦石工
	敷川内町	敷川内神社二の鳥居	明治18年(1885)	不明	解体 土台のみ
	敷川内町	敷川内神社一の鳥居	明治24年(1891) 3月	菅原甚太郎 菅原幸太郎	天草下浦石工
	敷川内町	敷川内天満宮	明治25年(1892) 6月	同上	天草下浦石工
	催合町	天満宮	昭和 3年(1928) 1月	菅原幸太郎 山本義久	
八代市日奈久	大坪町	日奈久阿蘇神社	大正 9年(1920) 9月	菅原喜三郎	
	大坪町	若宮神社	明治31年(1898) 9月	不明	
	竹之内町	竹内神社	明治19年(1886)10月	不明	
	中西町	温泉神社	不明	不明	解体
	中西 町	稲荷神 社	昭和10年(1935) 2月	不明	朱色 で着色
八代市二見	二見本町	二見阿蘇神社	嘉永 3年(1850)11月	不明	
八代市	二見本町	荒平神社	明治32年(1899) 2月	不明	
八代市	久多良木	久多良木神社	宝暦11年(1761)	不明	柱が二本継ぎ
八代市坂本町	渋利	毘沙門天	明治28年(1895) 9月	不明	貫が修復
			不明	菅原小口郎	解体 柱のみ
芦北田浦町	波多島	矢具神社	大正 3年(1914) 9月	不明	
	小田浦	小田浦阿蘇神社	不明	不明	解体
	海浦	海浦阿蘇神社	嘉永口年8月	不明	
芦北町	鶴木 山	鶴木山神 社	明治34年(1901) 9月	井上権次	天草下浦石工
	花岡	佐敷諏訪神社	明治38年(1905) 9月	菅原福蔵	天草下浦石工
	女島	女島神社二の鳥居	昭和15年(1940) 5月	釜金四郎	建設者と表記
津奈木町	岩城	津奈木阿蘇神社	明治元年(1868)	不明	解体
水俣市	長野 町	諏訪神社	安永 5年(1776)	不明	解体 柱のみ
	古城	陣内 阿蘇神 社	安永 5年(1776) 3月	不明	解体 柱のみ
	日当 野	住吉神社一の鳥居	大正15年(1926) 9月	大塚栄一郎	天草下浦石工
	日当野	住吉神社二の鳥居	嘉永元年(1841) 9月	不明	
鹿児島県長島町	平尾	十五社	大正10年(1921) 8月	不明	
	指江	十五 社	大正12年(1923) 8月	黒川末彦	天草下浦石工
	蔵之 元	十五 社	昭和 2年(1927) 1月	黒川末彦	天草下浦石工
	川床	若宮神社	昭和 2年(1927)10月	黒川 末彦	天草下浦石工
	赤崎	大堂神社	昭和13年(1938) 3月	黒川末彦	解体 柱のみ
	河内	十五 社	昭和13年(1938) 5月	黒川末彦	天草下浦石工
	小浜	十五社	不明	近藤	
	下山門野	若宮神社	不明	黒川繁太郎	天草下浦石工
鹿児島県阿久根市	古里	宮崎神社	天明4年(1784)12月	不明	解体 柱のみ

注)銘に天草下浦石工と入っている鳥居は備考欄に記載した。

(1) 熊本県北部

熊本県北部地域では荒尾市や玉名市で下浦石工による鳥居の存在を確認できた。この地域では表１に掲げた鳥居の他に砂岩製の鳥居があることが『岱明町史』（2005）で報告されている。また隣県の福岡県大牟田市諏訪町の諏訪神社には砂岩製の狛犬があることも報告されている。さらに熊本県よりもさらに北部に位置する佐賀県鳥栖市村田町には天草石を使っていると言われる肥前鳥居がある。この近隣にはこの鳥居の他に砂岩製の地蔵塔が多く造られている[4)]。

(2) 熊本市ほか

熊本市ではこれまでのところ西区上代の高橋稲荷神社の鳥居しか確認していない。熊本市内には神社の数も多いため、今後は白川沿いを中心に調査を進める予定である。なお、熊本市に隣接する嘉島町上島にある四所神社の境内には砂岩製の井樋口の石造物が保管されている。これには石工の銘があり、「天草下浦村　辰右衛門」と記されている。辰右衛門は天草本渡の祇園橋を造ったことで知られている人物である。その石工が嘉島町まで足を運んでいることから、江戸時代すでに下浦石工たちが広域にわたって仕事をしていたことがわかる。また城南町の著町にある民家には嘉永４年（1851）の鳥居の柱２本が立っており、石工は「杉嶋村　彌中」と記されている。杉嶋村は富合にある村であるが、なぜか砂岩が使われている。また、熊本市からずっと西に位置する阿蘇郡南阿蘇村の長陽村には「天草下浦船場千場彦太郎立之」と銘打った道しるべの他に天草下浦石工と銘打った作品が３例確認されている[5)]。

(3) 宇城市

これまでの調査で宇土半島南岸全域にわたって砂岩製の鳥居を確認することができた。その中で不知火町において４基の鳥居を確認できた。不知火町園田の天満宮では鳥居の本体は既に解体され処分されており、現在額束（砂岩製）のみが新しい鳥居の横側に安置されている。また同神社には弘化４年（1874）の砂岩製の金剛力士像がある。不知火町にはこれ以外にも十五社宮と高明寺で砂岩製の金剛力士像が遺されている。なお、宇土半島の北岸についてはこれまでの調査では砂岩製の鳥居を確認することができなかった。

(4) 氷川町・八代市鏡町

氷川町鹿野（旧竜北町）にある竜神宮の鳥居は江戸時代の古い銘文を復元した形で新しい鳥居に建て替えられている。古い鳥居〈安政６年（1859）〉は神殿の裏手に柱のみが遺されている。石工の名前は虎五郎である。この虎五郎という石工は同じ氷川町宮原町の祐覚寺宝篋印呪塔〈安政２年（1855）〉の銘文にも石工として記されているので、この石工が八代郡一帯で活動していたことを示している。次に八代市鏡町貝洲にある加藤神社の鳥居は現存する砂岩の鳥居の中でも大型のものであるが、部分的に傷みがみられるため早急に補修が迫られている。

---

4)　松隈崇「鳥栖・三養基の中世石塔」『栖』No.22（1993）による。
5)　前川清一『長陽村史』（2004）による。

(5) 八代市

八代市本町 4 丁目の住吉神社の鳥居は昭和 29 年（1954）のもので、下浦石工と銘打った作品の中では新しい鳥居である。石工は黒川若松で熊本市の高橋稲荷神社鳥居の石工と同じである。金子久明編『下浦石工物語』の中で黒川若松は「石塔　傘　蓮華　はさみの牡丹の彫刻は逸品」と評価されている。このように一人の石工が複数の作品を手掛けた例は八代で他にも 2 例見受けられる。一つは三山二蔵という下浦石工が豊原上町の遥拝神社と奈良木町の奈良木神社の鳥居を建てているもので、形も類似している。もう一つは菅原甚太郎及び幸太郎という下浦石工によるものである。鼠蔵町にある矢次神社の鳥居は明治 19 年（1886）に甚太郎により建てられた。続いて明治 24 年（1891）には幸太郎という石工と共同で敷川内神社鳥居を建てている。さらにその 37 年後の昭和 3 年（1928）に幸太郎は山本義久とともに催合町の天満宮鳥居を建てている。これらの銘文から菅原甚太郎と幸太郎は親子関係にあるのではないかと考えられる。葭牟田町の彌次神社鳥居はすでに解体されているが、遺されている石柱に「菅原□太郎」と銘があり、名前の部分が明確でないが、明治 26 年（1893）という年代から推測すると菅原甚太郎ではないかと考えられる。鼠蔵町を除く葭牟田町・敷川内町・催合町はいずれも球磨川南岸に位置し、隣接していることから菅原甚太郎の仕事ぶりを見たこの地域の住民が仕事の依頼をしたのではないか。

次に八代市の日奈久地区は 5 基の鳥居を確認できたが、この地区の鳥居には全て石工の銘が入っていないため隣接する敷川内町や催合町で仕事をした菅原甚太郎等との関連を調べることはできなかった。温泉神社鳥居は平成 27 年（2015）の台風で解体されてしまったが、その神社の隣にある稲荷神社の鳥居はなお現存している。この稲荷神社鳥居の興味深い点は朱色で着色されていることである。一般に木製あるいは鉄製の鳥居に朱色で着色する例は多く見受けられるが、砂岩製の鳥居に着色する例は珍しい。また、日奈久は明治中期から大規模な埋め立て工事を行い、街並みを拡大していった町であるが、大正の 3 年（1914）から 10 年にかけて天草下浦から大量の石材を移入している[6)]。このことから日奈久の埋め立て工事と下浦には深い関係があったものと考えることができる。

最後に久多良木神社の鳥居については、砂岩製の鳥居としては宝暦 11 年（1761）の建立と古く、この時代の凝灰岩製のものと同じで 2 本継ぎの柱となっている。

(6) 芦北・水俣地区

水俣市の諏訪神社と陣内阿蘇神社の鳥居は安永 5 年（1776）のものであるが、現在は柱のみが遺されている。このうち陣内阿蘇神社の鳥居の土台となる亀腹をコンクリートで固定し、貫と木鼻を通す形で修復が行われている。また水俣川の支流となる久木野川沿いに近い日当野の住吉神社にも砂岩製の鳥居が 2 基ある。この地区は水俣川河口から 10km 以上も離れた所に位置し、標高も高くなっているため石材の輸送には大変な労力が必要であったと思われる。

6）『熊本県産業調査書付録統計書』（1925）による。

(7) 鹿児島県長島町ほか

確認した8基の鳥居のうち、5基を黒川末彦が手掛けている。時代は鳥居の銘文から大正末期から昭和13年（1938）年になる。下浦地区での聞き取り調査によると黒川末彦は下浦町北東に位置する湯貫地区の人であるということであった。黒川末彦は地元の下浦神社の寄進者として玉垣にその名を連ねている。八代市の球磨川南部で明治中期に活躍した菅原甚太郎と同様、黒川末彦も長島地区の住民の信頼を得てこの地で製作に励んでいたのであろう。

長島町の南側に位置する阿久根市古里地区の宮崎神社には天明4年（1784）の鳥居の柱のみが遺されている。隣接する鹿児島県出水市では地元の調査によると砂岩製の石造物は長島町に比べると非常に少ないようである。

(8) その他

平成25年（2013）3月に長崎県島原市にある島原城周辺の神社を調査する機会を得たが、砂岩製の鳥居を確認することはできなかった。しかし猛島神社の鳥居は延安3年（1675）建立で、八代郡小川町の守山八幡宮の鳥居と同じ年代であり、形態も類似していることが確認できた（写真5・6）。加えて猛島神社鳥居の柱は佐賀県にある肥前鳥居と同じで3本継ぎで造られていた。また、島原市の市街地の北側に位置する三会町でも調査を行ったが、残念ながら砂岩製の鳥居を確認することができなかった[7]。ここでは熊本県北部の荒尾市や玉名市で見られるような黒っぽい凝灰岩製のものが多かった。

写真5　島原市猛島神社鳥居（2013）

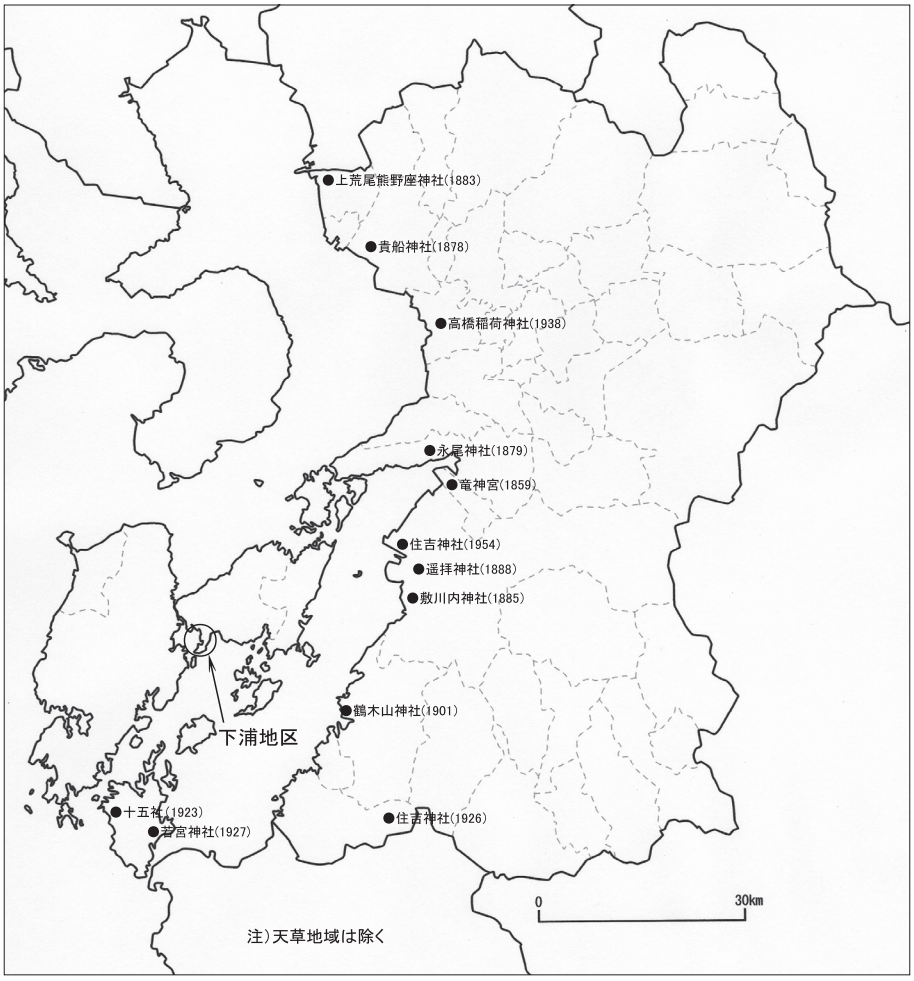
写真6　宇城市小川町守山八幡宮鳥居（2013）

7）筆者が三会町に着目した理由は、鹿児島県長島町川床にある若宮神社に元禄3年（1700）の石灯籠があり、銘文には、願主の名前に島原領三會村の井上惣兵衛と記されていたからである。

5. 結び

調査結果から、天草下浦石工の銘がある砂岩製の鳥居は、北は荒尾市上小路の上荒尾熊野座神社鳥居から、南は鹿児島県長島町の神社の鳥居まで存在していることが明らかになった（図2）。天草全域についてはすでに天草地区建設業協会による『天草建設文化史』（昭和53年）により天草下浦石工の作品が確認されている。したがって天草地域と、宇土半島北岸を除く熊本県の有明海と八代海の沿岸部、さらには鹿児島県の長島地域に下浦石工が製作した砂岩製の鳥居が存在することがわかった。これらの鳥居の存在は、天草下浦石工が幕末から明治・大正・昭和のはじめにかけて活発に有明海や八代海を通じて荒尾・玉名・熊本・八代・芦北・水俣、さらには鹿児島県の長島へ進出していったことを示すことになる。

図2　下浦石工による鳥居分布図



本稿では主に鳥居を中心に下浦石工の話を進めてきたが、下浦石工にとって鳥居は作品の一つにすぎず、多様な作品が上述した地域に現存している。八代平野では干拓工事で造られた樋門群、南関町あるいは水俣市の官軍墓地の墓石、松橋の三十三観音、さらに芦北の八十八仏にも砂岩が使用されている。こうした石造物は下浦地区以外天草の石工も多く関わっているはずである。今後の課題として、今回調査した下浦石工以外の石工にも目を向けながら研究を進めるとともに、熊本市の白川や緑川沿いの地域ではどの程度天草の石工が関わっているのか調査を継続したい。冒頭で述べているように砂岩製の石造物は雨風に弱いため凝灰岩製のものと比べて耐用年数が短い。近年、明治期に造られた鳥居が次々と新しい鳥居に建て替えられている。加えて、平成 28 年（2016）4 月に発生した熊本地震により数多くの神社の石造物が倒壊した。復旧にはこれから長い時間がかかると思われるが、少しでも記録を残しておきたいと考える。

謝辞

本稿の調査研究では元八代工業高等専門学校教授の佐藤伸二先生に多くの示唆をいただいた。また、熊本高等専門学校建築社会システム工学科の下田貞幸教授には鳥居の計測等を担当していただいた。誠に感謝申し上げたい。

参考文献

・金子久明編『下浦石工物語』
・「くらしに息づく下浦石工展」本渡市立歴史民俗資料館資料　平成 11 年 2 月
・天草地区建設業協会『天草建設文化史』秀巧社　昭和 53 年 5 月 3 日
・布袋厚『長崎石物語』長崎文献社　平成 17 年 6 月 14 日
・北野典夫『海鳴りの果てに（前編）』みくに社　昭和 53 年 9 月 1 日
・小川徳晃「肥前鳥居の研究―特色と分布―」杉谷昭監『佐賀平野の歴史地理学的研究』佐賀大学（1989）
・『熊本日日新聞』平成 17 年 1 月 24 日付
・肥後金石研究会　荒尾市教育委員会『荒尾の石造物』平成 6 年 3 月 31 日
・岱明町史編纂委員会『岱明町史』平成 17 年 9 月
・長陽村史編纂室『長陽村史資料第五集』平成 16 年 8 月

・出水市教育委員会社会教育科『出水の石碑・石造物』平成 13 年 3 月

・溝下昌美『くまもと球磨の鳥居』平成 10 年

・根岸榮隆『鳥居の研究』第一書房　昭和 61 年 10 月 6 日

・八代高専環不知火海文化交流基盤整備事業部会『天草石工の活動を通じた環不知火海の歴史と文化』八代工業高等専門学校　平成 20 年 8 月 29 日